

目次

- はじめに
- VTuber とは何か
- VTuber と騒動、炎上
- 中の人と騒動 個人勢のケース
- 中の人と騒動 企業勢のケース
- 「中の人」という概念
- これからの VTuber
- おわりに

• はじめに

バーチャル YouTuber 試論その脆さに関する考察
鯨善哉

Twitter やサブカルチャーに触れたことがある人ならば、バーチャル YouTuber (以下『VTuber』) という単語を聞いたことのない者は最早いと言っていないだろう。キズナアイ、ミライアカリ、電脳少女シロ、あるいはにじさんじに代表されるグループなど増加の一途を辿る VTuber は、今年五月には 8000 人を越えた。有力な VTuber は企業とのコラボやテレビ番組への出演なども増え、一過性のブームではなくひとつのネット文化として完全に定着したと言える。

だが、一種の芸能人ともいえる彼らは、炎上の危険性を常に抱えており、実際に度々炎上を引き起こしている。特にここ最近では、その「中の人」に関する問題が立て続けに起こり、界限に衝撃を与えている。ここでは、VTuber に関する騒動のいくつかを取り上げつつ、VTuber 中の人論を中心に、筆者自身の思うところを書いていきたいと思う。

• VTuber とは何か

まず、以下に論を展開するにあたって、ここで多用するであろう語などを、自分への戒めを込めて記すことにする。VTuber とは、バーチャルな要素を持つ YouTube バーのことで、外見が 3D か 2D の CG またはイラストになっているユーザーのことを指す。そして、そのキャラクターを通して配信を行う実際の人間を、ここでは中の人と呼ぶことにする。

VTuber は、アニメのキャラクターとは異なる。それは VTuber 自身がかつとも精密な設定を持っておらず、したがってどんな VTuber も多少の差があれど「中の人の個性」が発露することに由来する。アニメのキャラクターと違って現実世界のゲームを状況したり、現実世界の話題(例えば話題の映画であったり、なかにはコンビニバイトの話をするものもいたりした)をしたり、基本設定の全く異なる複数人が交流することも珍しくないことなども、それに拍車をかけている。VTuber はあくまでもユーザーバーのなかの一ジャンルであり、その中でも二次元の外見を持っているにすぎないのだ。三次元でも二次元でもない次元を生きていると言える。

また、VTuber にもいくつかの分類があるが、その中でも VTuber を大きく二つに分けると、企業勢と個人勢とに分けることができる。会社が VTuber を保有・運営し、中の人はその企業に雇われる形で VTuber としての活動を行う VTuber のことを企業勢と言い、それとは反対に企業の支援ではなく個人または少数人の技術のみで動画の作成編集、運営が行われている VTuber のことを個人

勢と言いつ。

VTuber を運営する企業にも、一種の VTuber 事務所の
ようなものを作り、その枠で多ければ数十人単位の
VTuber を活動させるタイプや、事務所のようなくくりを
作らずに一人ないしはごくわずかな VTuber を運営する
タイプもある。その両方の要素を持つタイプも存在する。

これらの企業は VTuber を運営することが本業だが、
中には株式会社サントリーや、やや特殊な事情があるも
の株式会社ウエザーニューズなど、自社の広告活動な
どに VTuber を活用する既存の有名企業も現れている。
株式会社サンリオは同社の既存のキャラクターを用いて
ユーザーの活動をさせており、しばしば VTuber と
して扱われるが、厳密には中の人の要素がほぼ必要でな
いためキャラクター YouTuber (VTuber) に分類される。

企業勢がその豊富な技術力やノウハウ、資金をバック
に高いクオリティの動画を出せる一方で、個人勢は会社
の都合にとらわれないフリーダムでカオスな独特の雰囲気
を持った動画を出せる、といったように、それぞれに
それぞれの魅力がある。

〈主な VTuber を運営することが本業の会社とその所属 VTuber〉

運営会社	保有団体	主な所属 VTuber
株式会社 Active8	upd8	キズナアイ、YuNi
株式会社 いちから	にじさんじ	月ノ美兎、本間ひまわり、静凜
株式会社 カバー	ホロライブ	ときのそら、白上フブキ、湊あくあ
株式会社 ZIZAI	ENTUM	ミライアカリ、猫宮ひなた、もちひよこ
株式会社 アップランド	.LIVE	電腦少女シロ、ばあちやる(非.LIVE 勢)、もこ田めめめ
株式会社 Unlimited	ゲーム部 ほか	夢咲楓、道明寺ここあ、音霊魂子
株式会社 mikai	Re:AcT	花鋏キョウ、獅子神レオナ、射貫まとい
株式会社 Smarprise	(グループなし)	富士葵、奏 MiMi
株式会社 Pictoria	(グループなし)	斗和キセキ、蒼乃ユウキ

注釈: チャンネル登録者の多い企業勢 VTuber で、運営会社が公表されているものを運営会社ごとに纏めている。

団体「upd8」は厳密には株式会社 Active8 が運営するのではなくプロデュースする連帯であり、個人勢でありながらも upd8 に所属する VTuber も複数存在する。

以降、読みやすさの観点から、

「」に囲った部分

VTuber の個人名またはチャンネル名を示す

《》に囲った部分

具体的な騒動名(ここでは界限で一般に呼称
されているものを採用しているが、複数の呼称
がある場合などは筆者が判断したものを採用
している)を示す

とする。

・Vtuberと騒動、炎上

炎上や騒動自体は、やはりVtuberというものが隆盛をはじめて以来常にまとわりついている。

Vtuber による問題行動には、「名取さな」や「花畑チャイカ」などが生放送中に油断して淫語を口走ってしまったり、「笹木咲」が引退から数ヶ月も経たないうちに復活して一悶着起こしたりと、大事に至らないどころかむしろ人気上昇に繋がったり好意的に受け止められたりすることもある。

しかし一方では度重なるマウンティングなどで炎上し、その後も廃品回収車に例えられた棒読み謝罪などで鎮火を怠った「渋谷ハジメ」や、CM提携した企業の同業他社の製品をバットでポコポコにする動画を公開して提携を打ち切られた「輝夜月」など、笑えないどころか人気や信頼を失墜させるような大事件を引き起こすケースもある。

しかし、それらのなかでも所謂「中の人」に関する騒動は、Vtuber に特有の騒動でありなおかつVtuber の人々そのものに直結するため、特にセンシティブに捉えられる一面がある。中の人の特定や推測はその好例だ。これまでの事例には、アンチを中心とする一団が中の人を特定しようと躍起になり、実際に特定され精神的な問題からしばらく活動を行わなかったケースなどがある。だが、それ以外にも中の人の問題はあ。以下では、「特定される」ということ以外の中の人の騒動を挙げていきたいと思います。

・中の人と騒動 個人勢のケース

個人勢Vtuber 炎上の先駆けとも言えるのは昨年一月の《のらきやっと顔バレ事件》かもしれない。猫耳美少女として活動し、個人勢でも指折りの人気を得ていた「のらきやっと」は、以前から中の人が男であることを公言していたものの、生放送中に突如猫耳美少女のAvatarではなく中の人であるおじさんの顔が映し出されるという原因不明の放送事故を起こし、以降再生数激減の憂き目にあつた。顔の動きを読み取ってAvatarの表情を作る、というVtuber の特性上誰にでも起こり得たこの事件は、中の人がおじさんだったことへの阿鼻叫喚とはまた別に、強い衝撃を与えた。

それとほぼ同時期、翌二月に起こったのが、悪名高い《Discord 事件》だ。

一部のVtuber たちが交流を目的としてDiscordにてコミュニティを作成したことに端を発する。それ自体がもともと他のVtuber を使った売名行為だとされ、電子掲示板のちゃんねるの住民によって目をつけられていたなど、炎上に至る下地はあつた。

そんななか二月初頭に行われたコラボ生放送において、Vtuber を離れた中の人丸出しトークをした者達が、そのなかでもキャラクターを守ろうとした他のVtuber をバカにするなど、ロールプレイすら捨て去ったただの馴れ合いが行われ大炎上した事件である。コラボや交流、ひいてはVtuber の活動自体を二種の「出合いの場」として扱っていたその姿勢は大批判を浴び、個人勢同士のコラ

ボそのものに暗い影を落とした事件であるが、後に被害者のひとりであった「ぜったいたい天使くるみちゃん」が事件後も精力的にコラボを行い、それらを立て続けに成功させたことでコラボへの忌避は払拭されている。

企業勢の席卷によつてクオリティや組織力、資金力で劣る個人勢ではあるが、「微糖カイジ」または「天開司」、「大魔王あつくん」、「ヤミクモケリン」などその高いセンスを活かし高い人気を持つものや、宇宙科学のアウトリーチを行い、日本天文教育普及研究会の年会で基調講演を行うなど評価を得ている「宇宙物理たんぽぽ」に代表されるように何かしらの専門ジャンルを持つVtuber もいる。また、バーチャルの美少女として受肉したおじさん、通称バ美肉おじさんというジャンルのように独特の文化が成立・展開しているのも個人勢の魅力の一つであり、企業勢では個人勢を完全には駆逐できないといえる。

また現在では、個人勢でありつつも企業による技術的支援を受けたり、企業勢と積極的にコラボを行うケースも多くみられたりするなど、企業勢と個人勢の接近などで境界が曖昧になりつつある。

・中の人と騒動 企業勢のケース

だが、前述の事例はいずれも個人勢が引き起こしたものであり、設備が不十分だったり中の人丸出しな姿勢だったりと言った、いわば個人勢特有のものである。しかし、最近ではむしろ企業勢特有の問題が深刻な問題として見え隠れしている。

その先駆は、昨年一月の「アズマリム運営員発騒動」である。チャンネル登録者数5万人を誇り、後輩キャラが人気を博していた「アズマリム」が、運営である株式会社 Cyber が本人の意向にそぐわない活動を強制されようとしていること、運営の独断で中の人が入れ替えられ（転生させられ）そうになっていることを突如 Twitter で告発。運営会社の中の人軽視やファンを金蔓としか捉えていない状態も示唆され、ファンのみならず交流のあった Yuber も含めた大反発を招くこととなった。その後運営会社が謝罪と転生しない旨を公表して終息し、その後は現在まで大きな問題もなく活動を続けているが、企業運営の Yuber がみずから Twitter で助けを求める異例の事態は激震を与えた。

また、これは炎上ではないのだが、中の人に関する騒動として、どうしても《バーチャル蠱毒》を挙げておきたい。正式には「最強バーチャルタレントオーディション」と呼ばれるこのプロジェクトは、要するにひとりの Yuber という「ガワ」に、どの人格(中の人)が宿るかをオーディションで決定するもののだが、その方法が、

「Yuber『候補』である人格12体を Twitter アカウントのみ与えて同時にネットの海に放ち、一定の期間活動させて最終的に投票で人格を一人に絞る」というものであり、同じアバターを持った10以上の候補が潰しあうその姿を古代中国の呪術「蠱毒」に準えてバーチャル蠱毒と呼ばれた。最終的に残った人格以外はアカウントもなにもかもを消去され、消えた人格を応援していたファンは、推していてそこにいたはずの誰かとは声も話し方も違う、ただ見た目のみと同じの誰かが「正史」としてそこにいる様を見せつけられるのである。人格候補たちの心境はファン以上に複雑だったと言ってよく、消えたくないという悲痛な願いを多くの候補たちが叫び、環境に耐えきれず途中で放棄するものも複数いた。そしてよしんば勝ったとしても、ほかの十一の候補人格のファンからどんな感情を向けられるか、想像したくもないはずだ。この勝つても負けても地獄という異様さ、残酷さは、ただただ狂気の沙汰であるという印象だけを残していた。

現在 Yuber 世界で最も深刻な炎上を続けている話題の一つが、一連の《ゲーム部騒動》である。その主役は、一時は5万人と Yuber 界で七番目に多いチャンネル登録者を有していた「ゲーム部プロジェクト」だ。夢咲楓・道明寺晴翔・桜樹みりあ・風見涼の四人からなる部活「ゲーム部」の部活動を公開するという設定のもと、ポケモンやスプラトゥーン、スマブラ、マリオカートといったゲームのオンライン対戦を中心に実況プレイなどを行うチャンネルで、毎日のように投稿されるシュールな寸劇も好評を博していた。

しかし、今年四月に突如、四人の中の人だとされる Twitter アカウントが運営の株式会社 Unlimited によるいじめに近いパワハラ、過酷な労働環境で働かされていることを暴露し、動画投稿も一週間以上途切れた。Yuber アカウントの真偽は結局不明のままだったが、実際に動画投稿が停止したことやその後の展開を考えると本物だとしてほぼ間違いないだろう。

その後運営会社は改善を約束したため動画投稿も再開されたが、どうやら何も変わらなかったらしく、六月十七日の投稿動画から突如桜樹みりあの中の人が交代。七月八日には道明寺晴翔の中の人も交代した。これらは何の報告もなくサイレントに行われたもので、また道明寺晴翔は他企業勢の Yuber とも積極的に交流していたことなどから彼らからも困惑や心配の声が上がるなど、多くの Yuber をも巻き込んだ大騒動となった。一七日に運営会社から、二人の声優が交代したこと、残りの二人も九月いっぱいまでに交代すること、そして会社が求めているのは Yuber というよりもキャラクター Youtuber (Tuber) であること、近々新しいプロジェクトが始動する予定であることなどの説明があったが、その一方で声優の交代と四月のパワハラ疑惑との関連についてはほとんど触れなかったことや、Yuber でないから中的人の意見など求めている、声の似ている代わりは募集すればいくらでもいる」と言っているようにも取れてしまう文面などによって火に油を注ぐ結果となった。現在も炎上は終息の兆しを見せずチャンネル登録者数は減少を続け、現在では3万を切り、チャンネル登録者数の順位も二桁にまで陥落した。

今年八月には、Vtuberという概念そのものの先駆者であり、親分の異名をとる「キズナアイ」にも炎上が起こった(《キズナアイ分裂騒動》)。五月に分業と称して突如四人に分裂して運営されることがアナウンスされたが、それ以降オリジナルであった一号の出演が激減したことと批判を浴びた。この理由について運営する株式会社Acube8とキズナアイ一号の説明が微妙に食い違っていることで物議を醸していた中、突如キズナアイ四号が会社の取締役と同棲している疑惑が出回り、愛人雇用だという批判で大炎上に発展した。炎上の初期でアフィリエイトサイトが「(取締役ではなく)社長と同棲していた」とデマを流したことや、同棲疑惑自体もファンの勇み足だった疑いが強いなど、多くの人が知るところとなった。大炎上に至った直接の原因は否定されつつあるものの、キズナアイの分裂とオリジナル(二号)の出演機会が減っていること自体は事実であることから、今後の展開が待たれる。

・「中の人」という概念

具体的説明はここまでにして、ここからは筆者自身の考察をしていきたいと思う。

要するに、個人勢が特有に引き起こすのは「中の人身」の問題で、企業勢が特有に引き起こすのは「企業による中の人の不自由」の問題なのである。これらの問題の根底にあるのは、Vtuberと中の人という概念そのものとの間にある大きな自家撞着であるように筆者は思う。

初期のVtuberは多くがいわば「バーチャルタレント」であり、中の人は声優など一種ロールプレイのプロフェッショナルであった。その後、技術的には一般個人でも後追いのできたVtuberというあらたな世界は、一般個人の大量流入によって、アバターの向こうにいる「中の人」をも楽しむという傾向に変貌していったと言える。例えば、「清楚」というキャラクターだった外側に、あるいはサイコパス、あるいは雑草をよく食べる、あるいは戦闘狂、あるいは自重しないショタコンなどの内側が入ることであるが、そのような見た目や初期設定とのギャップをも楽しむものと化していった。また、そのようなハッキリとしたものではなくても、トークやゲームのセンスなど、中の人身の性格がVtuberというプリズムを通して画面の前へと提供されているのだ。

それは、功罪の両方の側面がある。中の人が色濃く出ているということは、当然ロールプレイが求められていた初期とは大きく異なり、極まれば外側という概念自体が薄くなる。アンチの批判を流用するならば、「企業勢の奴らは、与えられた外側に設定された個性をかなぐり捨て、中の人の個人的な話をただ雑談として放送するだけ

で、投げ銭(スパチャ)によって一回の配信で十万は稼いでいる」のである。しかしそれでも、中の人という存在自体が、外見とのギャップが、Vtuberという概念を流行せしめ、一つのジャンルとして不動の地位を確立するのに大きく貢献したことは、決して否定することはできない。それどころか、中の人と外とはギャップを起こしつつもそれらを全てひっくるめたそれ自体がそのキャラクターなのだという考えのもと、むしろ強い個性を持つ中の人が強い人気を持つケースも絶えない。

また、内側という概念が薄くなるという事は、それはそれで問題である。特に企業勢のVtuberの中の人が薄いということは、中の人は誰でもいいという主張に、いとも簡単にすり替えられてしまう。

中の人なんて都合次第でいくらでも替えられるのだ、何故なら誰も中の人なんて見ていないだろうから——。そういう運営側の中の人軽視、そして無意識なファン軽視が、各種の炎上を引き起こしているのだ。

前述の《ゲーム部騒動》などは、その極めて典型的なものである、と言つていいだろう。台本の組まれた寸劇を投稿し、生放送でも基本的にはゲームをさせて中の人の個性を極力出さなかったために、声さえ似ている者があればいっただって交代させることができるという認識をしていたのだ。運営会社は、中の人には徹底的なロールプレイを求めている。一種、アニメの延長線上だと考えていたのだろう。キャラクターをうごかさずえで、声優の個性などみじんも必要ないのだ。ゲーム部に所属しているというキャラクターを忠実に守らせ、中の人、声優の個性を徹底的に認めないのであれば、本来、Vtuberな

どと名乗るべきではなかったのである。生放送などするべきではなかったのである。VTuberを名乗ることも、生放送—それも台本のないゲームの実況—をすることも、中の人の個性を許容してしまう行為に他ならなかったのだから。少なくともわざわざVTuberと名乗るという事はその覚悟があると見做されるものであったし、ゲームのプレイングには一人一人の個性が出るのだ。「実況」をさせること自体、内容の中の人の性格に大きく依存する行為だという事を、失念していたのである。

だがしかし、彼らはVTuberを名乗った。理由は簡単だ。そのときVTuberが大流行しており、多少クオリティが高ければ簡単に注目を集めることが出来たからである。だがしかし、彼らは生放送をしてしまった。理由は簡単だ。生放送は、投げ銭(スパチャ)を大量に稼げるからである。

結局のところ、お金に目がくらみ、中の人の個性を許容してしまった(当禁禁止はしていたらうが)がために、ちよつとした中の人要素が少しづつ確実にファンへと認識されていったことを、運営は見抜けなかったのだ。これが《ゲーム部騒動》の本質であると私は思う。利益や人気を求めすぎて、それを支えていたはずの物事を軽視してしまつたがために、企業勢の騒動は起こるのだ。

もちろん企業勢VTuberの中の本人が原因となつて炎上した事例もまた、いくつも挙げることができる。内容が内容であるだけにあまり詳しくは触れないが、デビュー五日で契約解除された元にしさんの「真堂雷斗」がその代表例である。とはいえ、やはり言つてしまえばそれは「個人勢でも企業勢でも起こり得る事柄」なのであ

つて、企業勢にしか起こりえない分、企業に責任があると判断される問題の方が、ずっと大きく、ずっと根深い。

そもそも「中の人」を楽しむとは、おかしなことである。「中の人などいない」という言葉に代表されるとおり、もともと中の人を詮索することはタブーであつたはずだ。「アニメキャラクターの声優」という意味で「中の人」を使うことがある。なるほど、たしかに声優を追っている者が一定数いる。彼らはむしろ、「中の人ありき」でアニメを楽しんでいるのかもしれない。だが、アニメキャラクターの声優は、原則として公開されているうえに、一人の声優が何人も声を当てている特性(こういうことを言う)と怒り出すキャラクター過激派もいるのだが、この特性が声優ファンという人々を生み出しているという事実を紹介したいだけであることをご理解いただきたい)がある。その特性ゆえに、アニメキャラクターとVTuberはやはり大きく異なる。ほとんどの場合中の人は公開されていないし、一人の中の人が普段から複数のVTuberの声をすることはまずない。この微妙な、しかし決定的な違いが、VTuberとは中の人も楽しむものである、という新境地を開いたのである。

しかしこの違いは、しばしば、アニメキャラクターの声優からの誤差の範囲として扱われることがある。美少女のAvatarがいて、声は実際の人間があつて。一目見ればたしかに、アニメみたいだ。だが、そうではない。遠目から見たら同じなら、あなたは理科室の透明な液体と蛇口をひねって出てくる液体を同一視しなければならぬ。液体という範囲に収まるなら誤差と言つていいのだろうか？

VTuberの脆さは、ここにありと言つていい。

VTuberは、アニメキャラクターの延長線上にあるのではない。むしろ、ユーザーの延長線上にあるものだとと言える。二次元が三次元に寄つたのではなく、三次元が拡大して二次元の方角に手を伸ばしたのである。VTuberの台頭は、ユーザーの浸透と爆発的普及の一つの結果に過ぎない。もしVTuberを、アニメの浸透がYouTubeでの配信へと結びついたものだと捉えるならば、十年前にはもう、バーチャルニコニコ生放送主(バーチャル生主)が一定の隆盛を誇つていてもよかつたはずだ。当然環境など条件が同じなわけではないために単純比較はできないが、少なくともそう名乗ることはできたはずである。どちらにせよ「今このタイミングで」「YouTubeで」VTuberが台頭したのは、アニメでも生主でもなくユーザーの存在、そしてその浸透が大きかつたと言えるだろう。

ユーザーは、そのやるだけなら誰でもできるという手軽さから大爆発を起こし、瞬間に認知された。そしてその拡大は留まるところを知らない。その過程で、顔出しという概念のないユーザーとしてVTuberが誕生したに過ぎない。だから、VTuberの本質はユーザーのそれと何一つ変わらない。彼らはユーザーであり、アニメのキャラクターとは一切関わりがない。ユーザーの中の人が勝手に入れ替わるだろうか？

にもかかわらず、VTuberのことを、アニメキャラクターとユーザーの間であるとか、いいことどりであるとか、そういうものであると勘違いしている人間が、運営にも、ファンにも、一定数居るのである。ひよつとしたらVTuberの中の人にすらいるかもしれない。

勘違いするから個性を重視しない結果になるし、特定に走るし、コラボを積極的に打って売名を図るのだ。

つまり、VTuber 関連の騒動や炎上は、これによるものである。ひいては VTuber というジャンルが衰退するとしたら、あるいはそれほどの炎上事件が起きたなら、それは間違いない。[VTuber] という概念自体への我々(運営)中の人、ファン)の無理解や誤解に起因したものであるだろう。

VTuber とはとても脆い概念である。他にない特性を持つていながら、その特性がゆえに崩壊の危機に立たされているゆえに、VTuber の中の個人ではそれを予防することができないからだ。そう考えると、中の人はとても可哀想な存在である。VTuber が好かれるのは全て中の人の不断の努力によるものでありながら、それが正しく受け取られるかは全く感知できることではなく、自身のあざかり知らないところで不断の努力をぶち壊しにされる危険性があるからだ。だから彼らは、余計に「中の人」を出さざるを得ない。そうすれば少なくとも、運営に個性を軽視されることはないからだ。それが、特定の危機を招くものだったとしても。それがユーザーバーから進歩した VTuber としての美点を薄める行為だったとしても。

・これからの VTuber

別に、VTuber に限ったことではないのかもしれないが、私は一連の VTuber の隆盛は、ゴールドラッシュに例えられると思う。

VTuber が鉱夫、ファンが金である。この鉱山を、最初から自分が金採掘者だと名乗って開拓したのが、「キズナアイ」であった。それ以前にも金採掘者のような存在がいなかったわけではなく([WEATHEROID TypeA Airi]が好例である)が、当時彼らは決して金採掘者ではなかった。

「キズナアイ」の活動は次第に広まり、2017年の末にはその存在が広く認知されるようになり、翌年以降、後追い(エイティナーズ、とても言うべきであろう)が大量に現れる。一攫千金を夢みる野心家たちが個人規模で流入する一方で、企業が多く採掘者を雇って採掘するケースもある。最近では、副業や副の一貫として鉱脈に乗り込む大企業や、個人の自由な採掘方法を重視して彼らに金銭的援助を行うだけの組合をつくる企業も存在するようになっていく。そして新たな鉱脈を求めて、次第に別の場所へと手を伸ばしていくことになるのだ。

だがしかし、明確に違うのは、金がとりつくされることがないことである。そしてなにより違うのは、この鉱脈は意思を持っているということだ。だから、変な方法は嫌われて、金の産出が減るかもしれない。

新天地の鉱脈開発、すなわち海外進出は既に活発である。大市場である中国の bilibili 動画にアップロードを行う VTuber は数多い。それだけでなく、海外発の

VTuber も多くいる。台湾の「虎妮」は流行以前から活動していたし、流行後は中国の「虚拟DJ」がその筆頭となっている。アジア圏以外ではロシアの「Земляраи」や日本で活動していたものの中の人ドイツ人である「音無りずむ」などがいる。

海外展開に積極的な運営会社として、にじさんじを運営する株式会社いちからを挙げることができる。国内の所属 VTuber に bilibili 動画へのアップロードを推奨しているほか、上海、台湾の企業と提携して VTuber の関連技術を提供し、それぞれにじさんじ上海、にじさんじ台北というグループで活動させるなどの展開を行っていた。にじさんじ上海・台北は今年三月末に提携終了、現地企業に完全移行となったが彼らの運営は成功したとはいえず、旧上海勢は既に七人全員が引退、旧台北勢も八人いたが、引退・活動休止・音沙汰なしが七人おり、活動しているのは一人しかいない。グループとしては崩壊したと言っていいたいだろう。

その反省を生かしてなのか、七月に発表されたインドネシア展開の新プロジェクト・NIZANTI は、株式会社いちからの直営プロジェクトであり、既に三名が活動している。日本のメンバーとの交流も行われており、順調な出だしたと言えるだろう。

ゴールドラッシュの行き先は、肯定的には地域全体の大発展、否定的には原住民の駆逐である。ここで言う地域が、YouTube を指すのか、サブカルチャーを指すのかは分からないが、これをひと時の流行で終わらせるのではなく、ボーカロイド曲制作のように一種の文化へと昇華させることは重要だろう。否定的な影響を考慮するな

らば、従来のサブカルチャー文化を駆逐するかもしれない、といったところであろうか。ただ、ゴールドラッシュにおける原住民の駆逐は、彼らのテリトリーの侵害が原因である。だから駆逐が起り得るのは、VTuberと棲み分けのできていないジャンルに絞られる。せいぜい考えつくのは衰退著しいニコニコ動画への死体蹴り程度だが、それでさえもある程度の区別のついている状態だ。筆者の発想力がないだけかもしれないが、VTuberの台頭によって大きな文化が消滅の危機に瀕しているという事例は聞かない。そもそも特異なものだから当然ではあるが。

・おわりに

さて、ここまでVTuberについて中の人という観点から論じた。誤解されていたら困るのではっきりことわっておくが、私はVTuberが大好きだ。設備や環境さえそろえばなりたくらいである。だからこそ、VTuberについて敏感でありたい。センシティブでありたい。途中厳しい表現を使った点もあるかもしれないが、私には攻撃の意図は全くない。むしろVTuberの更なる発展を期待して、この論を展開している。それだけはご理解いただきたい。

それでは、拙筆に打ち震えつつ、筆をおくことにする。

了

あとがき

ばんころ～（明大祭にお越しいただきありがとうございます）
三文文士会一年目、そしてこのPNを高校ぶりに使う男です。
これを手に取っているあなたは、どんな方でしょうか？
「賞えるもんは全部貰うぜ！」精神でしょうか。
「各大学文芸サークルハシゴだ！」でしょうか。
「三文文士の顔を拝んでやるぜ！」でしょうか。
どれにせよ、こんなところを読んでいるあなたは、どうやら大学の文芸サークルというものに——ひいては三文文士会に——適性があるようです。おめでとうございます。

令和元年10月18日(ㄨ切5h前)

鯨善哉